

青丘文庫研究会 月報 No.256

2011 年9月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 ※他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として2000円/年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

「夏の高校野球」

高野昭雄



今年の夏は高校3年生になる長男の高校野球の応援で幕を開けた。もとより毎年甲子園を狙えるような強豪チームではなく、京都予選の初戦を突破したのも4年ぶりの公立校である。しかし、自分達は校歌を歌うことが出来なかったOBや保護者の方々による必死の応援、吹奏楽部、ラグビー部、サッカー部の友情応援、その他息子が少年野球時代にお世話になった監督やコーチの方々、友人たち、大勢の方々の声援もあって、ベスト16に入ることができ、4試合戦うことができた。地方球場では、観客席とグラウンドの近さもあり、甲子園の全国大会にはない素朴でユニークな応援が見られる。相手校へのエールや礼儀マナーなど、OBの方々や生徒たちが爽やかで気持ちのいい人物ばかりだったこともあり、感動的な場面が非常に多かった。それは相手校も同様で、それこそが日々のしんどい練習を3年間続けてきた生徒たちの持つ宝物なのであろう。とりわけ相手校も含め、控えの3年生が登場したときの声援には熱いものが溢れていた。青春の輝きを見せてくれた選手たち、彼らを今まで支えてくれた先生方やコーチ、皆さん方にはただただ感謝の気持ちで一杯である。

経済界の論理が、教育の世界に持ち込まれて久しい。少子化もあって、受験結果重視、数値結果重視の高校教育には、もはや疑問ももたれていない。だが、日本中がのっぺらぼう化している中で、昔から変わらないもの、あるいは新たな感動を与えるものもまた確かにある。そういったことをあらためて教えられた。

第280回朝鮮近現代史研究会 (2011.5.8)

1910年代植民地朝鮮における歴史教育 佐野通夫

日本において、植民地期朝鮮における歴史教育を考察した研究は多くはない。その嚆矢といえるものは李淑子である。李淑子は主に植民地期の「朝鮮語」「国語(日本語)」教材の内容分析をもとに、『教科書に描かれた朝鮮と日本』を1985年にほるぷ出版から刊行した。「朝鮮語」「国語」教材の分析が、なぜ「歴史教育」の考察となるのか。

この時期は、「歴史」という教科は置かれずに、その内容は「国語(日本語)」において教えられていた。この時期の「国語」の週あたり授業時数は、第1、2学年で週26時間の内10時間(他は修身1、朝鮮語及漢文6、算術6、唱歌と体操で3)、第3、4学年で週27時間の内10時間(朝鮮語及漢文が5となり、

理科2が増える)であった(1911年10月20日「普通学校規則」)。学校は日本語を教える場であったのである。「国語」の課程は「読方、解釈、会話、暗誦、書取、作文、習字」とされているが、それを通じて「歴史」教育を行なおうとしたのであった。

李淑子は前掲書において朝鮮語読本および日本語(国語)読本について、その歴史上の人物の出現等を取り上げて検討した。日本語読本には日本の歴史上の人名、神話、伝説、物語上の人名が多数出現するのに対し、朝鮮語読本の中には、朝鮮の歴史上の人名、神話、伝説、物語上の人名は著しく少なく、かつ日本の歴史上の人名、神話、伝説、物語上の人名が朝鮮語読本に入り込んでいることが知られ、言語教育による歴史イデオロギーの浸透が裏付けられている。本報告においては、1910年『普通学校学徒用国語読本』、1913年『普通学校国語読本』の具体的な関連ページを提示し、1910年代植民地朝鮮における歴史教育を考察した。象徴的なことは1913年『普通学校国語読本』巻八には「附録」として「神代御略系及び天皇御歴代表」が付されていることである。

植民地下朝鮮における、あるいは日本の国内も同様であったが、「歴史」教育とは、民族の過去を知り、現在を考える、真の意味の歴史ではなく、その末期の「国民科国史」に典型的に示されるように「国体ノ尊厳ナル所以ヲ体認セシムルト共ニ皇国ノ歴史的使命ヲ自覚セシムルモノ」であった。そうであれば、それは体系的な歴史認識ではなく、天皇制神話なり、歴史物語なりを日本語および修身の教授を通じて浸透させることでも、十分その役割を果たしうるものであった。

*本報告は『韓国独立運動史研究』第38集(独立記念館韓国独立運動史研究所、2011.4)に掲載。2011年6月刊行予定の『植民地教育史研究年報』13(皓星社)にも簡略版を掲載予定。

第326回・在日朝鮮人運動史研究会関西支部会(2011.5.8)

戦前期の鶴橋署と朝鮮人—ゴム工労働者の7回のゼネスト計画をめぐる闘争を中心にして— 塚崎昌之



1913年に建てられた旧鶴橋署(1934年まで。それ以後は「大阪盲人会」の青十字会館となった)の建物の一部を利用していた俗称キョンチャル(警察)アパートが、今年5~6月に取り壊された。

1920年頃、現鶴橋駅北東の東小橋に「朝鮮町」が形成された。1919年に開始された猪飼野地区の耕地整理が竣工した1923年には、済州島—大阪直航航路も開設し、猪飼野・鶴橋地区に急速に朝鮮人人口は増えていった。朝鮮人の急増に伴い、治安維持に不安を持った鶴橋署は1925年3月に朝鮮人人事相談所を設け、就職斡旋や「模範朝鮮人」の表彰などを行った。8月には朝鮮人自治会として鶴橋署内を18の管区にわけ、各区に朝鮮人委員を置き、朝鮮人の生活状況を鶴橋署長に報告させることにした。朝鮮人「管理」体制の構築を狙ったのである。しかし、急増する朝鮮人人口に組織は追いつけず、1928年10月には鶴橋内鮮自治会と組織を変更し、日本人との関係を問題にするようになった。

世界大恐慌に突入した1929年10月、済州島朝天里出身の金文準が猪飼野の朝鮮人ゴム工を集め、大阪ゴム工組合を組織した。この頃、猪飼野周辺には約30のゴム工場があり、朝鮮人1000人以上が就業していたと考えられ、その多くが済州島出身者であった。大阪ゴム工組合は結成直後から、多くの工場で労働争議を指導、その多くを一定の条件で解決した。女性が半数近くを占めていたことがこの組合の特徴であり、女性のみ争議も起こった。当時、一国—共産党問題が起こっており、在日本朝鮮労働総同盟は内部での抗争はあったが1930年1月に解消し、日本人の組合と合同し、全協の下に産業別に組織されることになった。大阪ゴム工組合も5月に全協日本化学労組大阪支部に移行した。大阪支部と銘打ったものの、組合員は猪飼野の済州島出身朝鮮人のゴム工がほとんどであり、全協に移行した目的の日朝共闘や産業別などとはほど遠いものであった。他の地域やガラスなどの他の化学職種の朝鮮人は、全協以外の別の左派

組合の指導下にある化学労組を結成した。朝鮮内部における地域抗争が、労働運動にも大きく影を落としていたのである。

この当時の日本共産党は大衆が急速に革命化し、革命的状況に向かっているとの認識の下、権力に向かっている大衆的蜂起を目指した。その手法が革命的街頭デモであり、ゼネストであった。全協化学大阪支部はその方針に忠実に、1930年に2回、1931年に4回、1933年に1回の猪飼野ゴム工場のゼネスト計画を立てた。しかし、曲がりなりにもゼネストの体裁を取れたのは第5回目の1931年5月のみであり、計画の度に多くの朝鮮人が鶴橋署に検挙され、留置された。釈放を勝ち取るために、夜遅くに鶴橋署に女・子どもも含めて押しかけることも度々あり、石を投げて正門のガラスを破壊することもあった。これらの行動が中央の指示を受けたものであるかどうかは不明である。5回目のゼネストが終わった頃から、猪飼野のゴム工の全協離れが始まり、争議は中間派や現実派が指導する例が多くなる。それとともに、全協化学労組大阪支部の行動は過激化し、鶴橋署襲撃計画まで度々立てられるようになる。おそらく、この頃から鶴橋署の移転が検討され始めたと考えられ、このような状況が移転を促した一つの要素として考えられる。

1934年に入ると、鶴橋署等の弾圧の前に全協化学労組大阪支部はほぼ壊滅する。時を同じくして、社会事業者が運営の主体であった内鮮協和会に対して、警察関係者が主体となった大阪府内鮮融和事業調査会が発足し、朝鮮人に対する「同化」政策が本格化する。鶴橋署も鶴橋本通りから郊外の勝山に移転し、それと同時に、鶴橋内鮮自治会は鶴橋矯風会となり、内鮮融和事業調査会の「同化」方針を忠実に実行していく機関となった。

猪飼野のゴム工は済州島の中でも北部と南部に多く、特に南部の法還里は渡航者の40%以上がゴム工であった。1920年代初頭に来阪した法還里出身の康興玉は、日本人経営のゴム工場で働いたが、1929年に独立し、ゴム靴を製造する三益ゴムを経営するようになった。それと同時に法還里出身者を集め、「済法青年会」を組織し、立命館大学出身の弟の康慶玉らに成人教育機関も運営させた。法還里出身者には三益ゴムで技術を学び、独立していった者も多くいた。1940年には法還里出身者の経営するゴム靴工場は少なくとも5工場はあったと思われる。弟の康慶玉は靴も含め様々な事業に関連するとともに、鶴橋にあった在日朝鮮人耶蘇長老教会大阪東部教会の長老になった。1941年には、在阪朝鮮人の戦争協力機関である大阪協和協力会の副会長に就任した。しかし、かれは1942年の日本キリスト教団の総会で朝鮮人の差別を「言動矯激」に問題としたため、議長から弁論を中止させられたこともあったように、民族主義者の面も持っていた。

法還里出身で神戸のゴム工労働運動を指導していた康元範は1934年に検挙され、「転向」を条件に釈放され、猪飼野に移ってきた。康元範は金文準らが発行を始めた在日朝鮮人の生活権利擁護を目的としていた『民衆時報』の東大阪の配布責任者になったと言われる。現存する『民衆時報』はかれが所有していたものである。康元範はその一方で、「済法青年会」の後継団体である「済法建親会」の初代委員長となり、康慶玉が理事長をしていた「大阪縫付規格靴製造組合」の副理事長を務めた。

鶴橋矯風会は1940年には大阪府協和会鶴橋支会となった。戦争末期の1944年末に、康慶玉らの内務省への働きかけにより、協和会は興生会に組織変更した。警察の影響下から一定距離を置き、支会事務所も警察署内から移転したところもあった。康慶玉の膝下であった鶴橋署もそうなった可能性が高く、鶴橋署移転後に青十字会館に増改築されていた元鶴橋署に移ったのではなかろうか。戦後、青十字会館には朝鮮人連盟生野支部鶴橋分会事務所が置かれ、猪飼野の朝鮮人連盟の運動の拠点の一つになったが、戦後すぐの朝鮮人連盟は後に「親日派」として排除される康慶玉らも加わっており、その当時に朝鮮人連盟が興生会支部事務所を接收したと思われる。また、大阪府ゴム薄物商工業協同組合が青十字会館を利用しているのも康慶玉らの影響があったと考えられる。兄の康興玉は民団大阪府本部の初代議長を務めるとともに、生野区朝鮮人学校建設期成委員会会長にもなっている。一方、康元範は朝鮮人連盟の中央委員の一人とな

った。

戦時中から戦後しばらくの間の時期は、共産主義者、労働運動家、民族主義者、「親日派」とはっきりと分けられるわけではなく、地縁的結合、職業的利害などの要素も絡み合いながら、多くの朝鮮人は時代状況により、その間をゆれ動いていたのである。

●青丘文庫研究会のご案内●

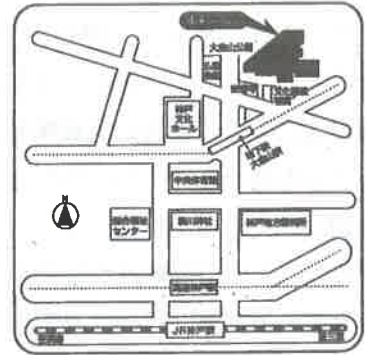
■第327回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

9月11日(日) 午後3時～5時

「再論・龍王宮から済州へ、そして再び龍王宮へ：
済州に関する「常識」と「在日二世的信憑」と
「村落共同体の構造」 玄善允

■朝鮮近現代史研究会はお休みです。

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



<以下のセミナーの資料集を販売します。560円。購入希望者は、送料80円ともで、80円切手8枚(640円分)を神戸学生青年センター飛田までお送りください。>

2011年 韓-日 合同学術セミナー

〈主催〉韓日民族問題学会、〈参与〉在日朝鮮人運動史?研究会(関東部会、関西部会)、〈主題〉「戦後日本の市民運動を通してみる日韓関係と在日朝鮮人」〈後援〉光云大学校、湖南大学校

〈日程〉2011年8月5日(金): 学術セミナー、8月6日(土): 仁川港歴史探訪

〈発表〉山田昭次(立教大)「関東大震災時朝鮮人虐殺事件をめぐる戦後日本の運動—追悼・調査から国家責任追及まで」、樋口雄一(高麗博物館)「私が見た戦後日本の朝鮮関連の研究と運動—日本朝鮮研究所を中心に—」、飛田雄一(神戸学生青年センター)、「私が見た日本の戦後補償運動の役割と課題」、堀内稔(むくげの会)「神戸地域における朝鮮関連運動の役割と課題」〈討論等〉金廣烈(光云大)、金太基(韓日民族問題学会長、湖南大)、朴晋雨(淑明女子大)、任盛模(延世大)、許光茂(強制動員真相究明委)、金仁徳(成均館大)、金ミンヨン(群山大)、呉一煥(強制動員真相究明委)、崔永鎬(霊山大)、鄭惠壇(強制動員真相究明委)〈フィールドワーク〉仁川港周辺における旧韓末の中国・日本の租界地探訪(地下鉄1号線で移動) —仁川チャイナ・タウンで昼食の後、解散

神戸学生青年センター・朝鮮史セミナー2011秋

『非常事態宣言—在日朝鮮人を襲った闇1948』

講師: ルポライター・金賛汀さん/2011年10月8日(土) 午後3時～5時/参加費: 600円

会場: 神戸学生青年センター/主催: 朝日病院・神戸学生青年センター

※当日午後5時半より出版記念会を開きます。詳細は、学生センター飛田までお問い合わせください。

【今後の研究会の予定】

2011年10月9日(日) 在日(渡辺さえ)、近現代史(未定)、11月13日(日) 在日(未定)、近現代史(朴炳涉)。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

10月号以降は、全淑美、塚崎昌之、玄善允。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

■ソウルセミナーは、内容豊かに開催されました。韓国側でご準備くださった方々に感謝します。ごくろうさまでした。■暑かった今夏です。神戸・南京をむすぶ会のツアーで南京と海南島にいきましたが、熱帯の海南島の方が涼しかったです。フィールドワークノートがあります。560円、希望者は送料とも80円切手8枚、640円分を飛田までお送りください。 飛田雄一 hida@ksyc.jp